

GMOD 彼の地にて、斯く  
戦えり

アールド・レナウス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

元ロシア連邦軍兵士だったレギル・ニコライ・エリセイヴィッチという男はある日目覚めると見知らぬ世界にいた。

中世の騎士がいたり、バケモンがいたり自衛隊がいたりメチャクチャだが、GMOがあればなんでも解決だ！

※自衛隊の味方になるとは一言も言っていない。

# 目次

アドオンの数だけ強くなる	1
やったあ!!アメリカ万歳!!	5
(イタリカ消滅回避ルート) Epic	S
ax	9



# アドオンの数だけ強くなる

2019年 11月 16日

真冬の中、暖房を効かせ、日光がカーテンの隙間から差し込んでいる部屋の中でゲーミングPCと睨めっこする男がいた。

画面に映っているのは某FPSゲームの最新作、B〇Vである。

もう既に次回作の情報も出ており、B〇Vはプレイヤー達から飽きられつつあった。だが、そんな状況を覆したアツプデートがされたのだ。

それは日本軍、アメリカ軍の実装だった。

このアツプデートのお陰でB〇Vはかつての勢いを取り戻し、今まで飽きられつつあった第二次世界大戦モノのFPSでありながら過去作のB〇3並に人気がうなぎ登りとなった。

しかも来年にはソ連軍や東部戦線のマップも追加される事が決定され、運営は少し遅めにプレイヤーの願いを叶えたのだ。

そしてそれをプレイしている男は、ラノベにありがちな日本人のイケメンオタクゲーマー……………

ではなく、モスクワ在住のロシア人の男、レギル・ニコライ・エリセイヴィッチという名である。

確かにニコライはゲームは大好きだが、別に引きこもりでもない。

暇があれば外に出て友人と遊んだりもしている。

この前なんか氷の張った湖の中にロケット花火をぶち込んで遊んでいた。

実を言うと彼、ニコライは元ロシア連邦軍兵士で、しかもスペツナズからもスカウトが来ていた程の腕前を持っていた。

しかし、既に彼は軍は辞めている。

何故かと言うとニコライは学力が低過ぎる上にやる気の無い男だったからだ。

物覚えは悪く、銃のメンテナンスすら長時間を要する不器用で数学は基本的な計算以外全て全滅の癖に使い所の無い知識ばかり付けている。

そんなニコライだったが訓練ではいつもトップだったのだ。

射撃訓練、格闘訓練共に成績一位、体力もあり、やる気は無いくせに忍耐力はある兵士だった。

そんな彼を上官は表では罵詈雑言を浴びせ、怒鳴り散らしていながらもニコライの事を優秀な兵士と評価していた。

それ程に彼は強かったのだ。

射撃訓練では的を外す事はほとんどなく、格闘術では非番の時にたまたまコンビ二強盗に巻き込まれた時にその強盗犯を返り討ちにした事もある。

そして彼の元にスペツナズからスカウトが来たのだ。

だが、彼はスペツナズには入らず、次の月に軍を辞めた。

理由は、訓練が辛かったというのもあるが、彼を突き動かした物があつたのだ。

それはゲーム、彼はゲームの魅力にゾッコンとなり、余生をゲームと共に過ごす為に軍を辞めた。

今はニコライの願い通り、ゲームとの生活にどっぷりと浸かりつつ、自分よりも前に退役した同期と遊んだりもしていた。

この生活にニコライはとても満足している。

ネットゲで知り合つた日本人の話によれば、その日本人は高校生で進級やら後の就職の為に毎日せつせとデスクで何時間も勉強しているんだそう。

大変なこつた。日本人に生まれなくて良かったぜ。

勉強を嫌う彼は今日もゲームをしながら自由な生活を楽しんでいくのだった。

\*

\*

ある日、ニコライは違和感を覚えて目を覚ました。

なんだ…？ やけにクソ暑いな。それに背中がゴワゴワする…。

違和感の正体を探る為に半身を起こすとそれは直ぐに分かった。

「おいおい、一体何が起こったってんだ？」

目を覚ませばそこは一面の平原。

風が吹くたびに草が揺れ、日光が大地を照らし、真冬のロシアとは思えない程の暑さだった。

立ち上がろうとして足元を見ると、何かが落ちている事に気付いた。

「なんだこりゃ……つてまさかこれって!?!」

そこにあつたのは自分にとつてとても見覚えのある道具だった。

西部開拓時代にありそうな回転式拳銃に小型のディスプレイが撃鉄の位置に取り付けられており、他の箇所にも様々な電子機器が取り付けられていた。

「ツールガンじゃねえかこれ！」



やったあ!!アメリカ万歳!!

同時期、日本でも異世界からの軍勢による攻撃を受け、街中に突然現れた“ゲート”に自衛隊を派遣することとなった。

既にアルヌスの丘では自衛隊が陣地を築いており、それを阻止しようとした十万以上の兵士が返り討ちにあった。

そんな中、偵察隊は撃墜したワイバーンなどの鱗を売る為にイタリカという街へ向かうおうとしていた。

一方、ニコライはというと。

「ハハハ！コイツはすげえや！」

ツールガンを操作しながら子供のようにはしゃいでいた。

どうやらG M O Dの全ての機能がツールガンで使用出来るらしく、小型のディスプレイで操作していた。

タッチパネルではないが、自分の目線や意志に応じて動いてくれるようだ。

よし、ならまずは……。

ディスプレイを操作し、あるモードをオンにした。

” 当たり判定無し”

これを有効にし、飛びイメージを頭の中で浮かべると、ニコライは空を飛んだのだ。  
「うおおー！」

といつても、飛び方はツールガンを構えたままなんの動作も取らずにスイスイ動くという他者から見れば気持ち悪いものだが、ニコライにとっては素晴らしいものだった。

そして時間は飛んでニコライはイタリカの街を当たり判定無しで飛んでいる最中に見つけた。

「おお、何だか賑やかだな」

城壁の門の前では盗賊とそれらから街を守る民兵や中世の騎士らしき者達がいた。

「んっ？」

ニコライはその脳の足りない頭で閃いた。

ここであの街救えば報酬とか貰えたりして将来安泰じゃね？

そこでニコライは足りない頭よりも体を先に動かし、ダウンロード済みのアドオンの一つからあるものを取り出した。

それは、RPG-7の弾頭がアホみたいにデカくなったもので、その武器の名前はこう呼ぶ。

” デイビー・クロケット”

やめろオオオオオオオオ!!と神か誰かしらが叫んだような気がしたが、そんな事は気にせず、デイビー・クロケットの照準をイタリカの門前の盗賊達に合わせる。

「コイツを拝みなあ！俺の体の一部だぜ!!」

とある好きな映画の名言を放ちながらデイビー・クロケットの引き金を引いた。

バシユウウ!!とクソデカ弾頭が発射され、数秒後、イタリカの門前辺りから凄まじい光が発生し、それに遅れて爆発音が衝撃波と共にやってきた。

そして、ニコライにとって予想外の事態が発生した。

爆発の威力が強すぎてよく見えないが、門の向こう側まで爆炎と衝撃波が襲いかかっていた。

というかもう手遅れだった。

イタリカは核爆発で爆発四散し、その様子を眺めていたニコライの顔は徐々に青ざめていった。

「やっちゃまった……!」

オマケに爆発の威力が強すぎて衝撃波がニコライの元まで到達したのだ。

「あれ?これやばく——」

衝撃波に巻き込まれたニコライはまるで木の葉のように空を舞ったのだった……。

その後、イタリカ”だった場所”を訪れた偵察隊を率いていた伊丹耀司は後の報告で

こう語っている。

「なんか遠くから煙が上がっているのが見えたんですよ。　そこで近付こうと思ったら空からロケットみたいなのが飛んできて、煙が上がっていた場所が大爆発したんです。

その後は衝撃波で車両が吹き飛ばされたりして大変でしたよ」  
ちなみに報告を行ったのは病院の病室だった。

# （イタリカ消滅回避ルート） E p i c S a x

「いや、やっぱりデイビー・クロケットはよそう。威力が高過ぎる」

無いに等しい頭から奇跡的に正解を導き出す事に成功したニコライは別のアドオンから武器を取り出す事にした。

”それ”を右手に持ったニコライは当たり判定無しでイタリカの門前まで飛んでいき、武器の効果範囲まで接近した。

「な、なんだありやあ!？」

「新手か!？」

「空飛んでやがる!」

盗賊達の後方で浮遊しているニコライを盗賊達や民兵、女騎士らしき者達が貝のような口で見つめていた。

盗賊と城壁の守備兵が警戒する中、ニコライは右手に持っていた”それ”を構え出した。

それは金色のブブゼラの形状をしており、到底武器には見えなかった。

「一体何をしようというのだ……?」

城壁からは赤髪の女騎士が怪訝な表情でニコライがブゼラを構える様子を見てい  
る。

そして、ブゼラを口に咥えたニコライは思い切り息を吹き込んだ。

最初は何ともなく、ただブゼラから発せられるとは思えない聞いたことも無い曲が  
流れ続けるだけだったが、5秒程経つと門前にいた盗賊達が突然発火したのだ。

「あつ!?!ああああああああつ!!熱い!!誰か助けてくれえ!!」

突然の出来事に盗賊達は対処できず、次々と発火する仲間を狼狽えながら見るだけ  
だった。

「うわあ!?!何が起きてやがんだ!?!」

演奏開始から僅か十数秒で盗賊達は火の塊と化し、断末魔や助けを求める悲鳴にも近  
い声が合唱の如く響き渡った。

「何が起こつ——」

全身火達磨になった盗賊がのたうち回っていると、その盗賊が突然爆発四散し、肉片  
と共に爆風を発生させ、周囲の盗賊を吹き飛ばしたのだ。

この武器の名は「Epic Sax」。

Epic saxを使用すると範囲内にいる植物などを除く全ての生物を発火させ  
る。

しかし、効果はそれだけではない。

一定時間燃え続けた生物は爆発するのだ。

そしてその爆発の威力は手榴弾並。

こんなイカれた攻撃が門前にてひしめき合っていた盗賊達に行われていたのである。

勿論密集した盗賊達は炎上と爆発によってたちまち全滅した。

残されたもがいていた盗賊も終いには爆死し、イタリカの門前には焼け焦げた盗賊達の死体によって埋め尽くされており、異臭を撒き散らしていた。

「ふう、こんなもんか」

Eric saxをツールガンで削除すると城壁の真上まで移動し、当たり判定無しを解除して赤髪の女騎士、ピニヤ・コ・ラーダの右隣に降り立った。

「……………」

「……………」

ピニヤと城壁の守備兵は呆然とニコライを見つめており、それをそりやそうかと思つたニコライは静まり返つたイタリカの城壁にて取り敢えず左隣にいたピニヤに声を掛けることにした。

「Привет Там! ご機嫌いかがですか?」

そして、後でやってきた伊丹達は門前の異臭によって吐き気を催し、それを見たピ

ニヤがドアを勢いよく開けたせいで伊丹が負傷、エルフの娘に説教を受けるのだった。